

## 週日の説教（初金・癒<sup>いや</sup>しのミサ）

金 大烈 神父 2010年5月7日（金）

### 《イエス様を選んで下さった》

おはようございます

今日の福音（ヨハネ 15・12-17）の内容は、一言、一言がすばらしい御言葉ばかりでした。

さあ、ある奥さんがいました。冷たい風が吹いている冬のある日、彼女が出掛けようとしたら、自分の家の玄関に、ふるえている一匹の子猫が見えました。気の毒な気持ちになって「どうすればいいか、このままに置いてしまえば大変なことになるでしょう。」と思いながら、自分でも知らないうちに情けをかけていました。そして、子猫を自分の家の中に入れようと思い、手をのばしたとたん、その子猫は背中を高く丸めて爪を立ててきました。その瞬間、奥さんはびっくりして一歩後に退きました。その時「ああ、私は子猫を助けようと思ったのに」と情けなく思いながらも、自分もふと「私はこの子猫のような生き方をしているのではないか。」このような気持ちになったそうです。

イエス様はいつも私に、手を伸ばそうとしているけれども、私は自分も知らないうちに色々な恐怖感、恐れによって拒みを見せているのではないか。いつも私に、正しい道を歩ませようと、イエス様は私を見て下さっているにもかかわらず、私は暖かいその手を、御手を、拒んでいるのではないかと悟りがあったそうです。その内容を読んで「そうだ、この世の中はこのように動いているのだ。」と自分も強く感じました。皆様はどうでしょうか。多分、私は違いますとは言えないでしょう。いつも自分勝手に自分が基準になって、神様に文句を言ったこともあるでしょう。「何故、こんなことが私に」と。しかしその時こそ、誰よりももどかしい心で、私達に手を伸ばそうとしているのが、イエス様じゃないかと考えてみました。

今日の福音にある、『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。』この御言葉はよく聞きましたよね。しかし、この御言葉をすぐに忘れてしまうのが私達だと思います。大体私達が、色々な宗教の中でカトリックを選んで、イエス・キリストの道について行こうと決心したと錯覚しています。いいえ、そうではありません。私達が選んだのではなくて、イエス様が私達を選んで下さいました。そうじゃなくて、私がイエス様を選んだということになれば、いつでもイエス様を棄てられます。ちょっと気に入らなかつたら、間違えたと思いながら教会から離れます。ですから私達がここまで歩いてきて、信仰の生活することが出来たのは、そして、これから私がどのような道を歩もうとしているのか、そういう心が許されたことさえ、イエス様を選んで下さったからといつも意識しなければなりません。ただ私達の望ましい態度は、その呼び掛けに正しく応じること、答えること、それしかないというその心が必要じゃないかと思いました。

『互いに愛し合いなさい。』この御言葉はどういうことでしょうか。そして、今日の福音の最後にイ

イエスは『これがわたしの命令である。』とはっきりおっしゃったのです。「私が選んだあなたがた、私があなたがたに与える一番ふさわしい道、その道を歩むためにはあなたがたは私の命令を守らなくてはならない。それはそんなに難しいことではない。それは“互いに愛し合う”こと。」とおっしゃったのです。しかし、私達はいつも忘れてしまいます。今日の福音を通してもう一度私達が考えなければならない唯一の生き方について思い出してみましよう。

さあ、癒しと言えば色々な観点から話が出来ると思います。しかし、カトリック教会の中で、2000年間保ったその霊性の中で話されている癒しは、内的な癒しです。カトリック教会が正式に名付けたものは「内的治癒」と言います。いわゆる心の癒しですね。肉体的に色々な病を持っていると思いましよう。それが何か特別なカリスマによって、神様の恵みによって、癒されたとしましよう。その癒しは結局続きません。この肉体は癒されても、何回、何百回癒されても、結果的に行く道は唯一しかありません。しかし、一回癒されたら救いまでつながるのは、それは内的治癒です。その内的治癒とは何でしょうか。結局傷からの癒しです。その傷は自分が自ら受けた傷もあるし、環境によって受けた傷もあるし、他人から受けた傷もあると思います。環境といえば色々な傷つき易い環境、色々な経済的に弱い環境、色々無視される環境、そのようなことから自分を愛することさえ、自分を大事にしなければならないことさえ忘れてしまった状態を癒されることです。傷だらけで終わってしまうと、私達は絶対イエス様に向く心を失ってしまいます。感謝が出来ません。しかし、その傷が癒されると、その傷は傷で終わる事なく神様にもう一步進める、近づける、強い本当にすばらしい恵みになるわけです。

ですから皆様、もちろん司祭の立場では、「この方の病を癒して下さい」と祈ります。それよりもっと強く願うことは「何があってもこの痛みを受け入れられ、平安な心を保つことができるように導いて下さい。」という祈りが率直な私の（司祭としての）祈りです。

皆様癒しを求める心、「色々癒されたらいいな」と思われる事が結構あると思います。しかし、癒しを求める前に、いつも準備として持たなければならないのは、「私の心を癒して下さい。」と願う心が必要じゃないかと思います。

司祭の癒しの按手（一人一人に）

按手を終えて

交わりの儀の中で司祭は黙って祈ります。「今ここに一つとなる主イエス・キリストのからだと血によって、わたしたちが永遠の命に導かれますように。」と。また「主イエス・キリスト、あなたのからだと血をいただくことによって裁きを受けることなく、かえってあなたの慈しみにより、心もからだも強められますように。」と。あらゆる司祭は信者の皆さんが、「神の子羊」と唱える時、拝領前の祈りとして静かに捧げています。

ありがとうございました。